

関西大学所蔵

「村田春門家集」(原題『藤門雑記 近代和歌』)

関西大学図書館 手紙を読む会

今回ここに紹介するのは、昭和三十二年に関西大学図書館所蔵となった「岩崎美隆文庫」中の「村田春門家集」(原題『藤門雑記 近代和歌』)の翻刻文である。岩崎美隆は、文化元年(一八〇四)に生まれ、四十四歳の若さで弘化四年(一八四七)に亡くなった河内国花園村(東大阪市)の国学者、歌人である。村田春門(一七六五―一八三六)の門人で、生涯河内から出ることなく終わった人であったが、枕草子研究や和歌に特筆すべき成果をあげ、当時一流の国学者であった和歌山の加納諸平(一八〇六―一七七)とも交流があり、近隣の中西多豆伎、荒木義蔭は、美隆の門人である。本書は、師である村田春門の家集作成のために、春門の和歌を抜き書きしたものであり、巻末に「天保四巳年(一八三三) 正月九日写畢 美隆」の記載がある。全七十五丁にわたり細やかで流麗な文字で筆写されており、初句右側部分に――の印や、色紙で付箋がつけられた和歌が散見し、家集作成時に選歌すべきか、校閲した跡が残る。和歌総数千七百七十九首(内十二首は市岡猛彦の和歌)であるが、今回の翻刻は前半部分の四百三十七首である。

そのうち詠作年代が判明しているものは、後半部分になるが、詞書に「以下卅首 文政三年(一八二〇) 正月廿二日夜詠」とある三十首である。それ以外の詞書中の語句や人名で、詠作年代が推定される事項を挙げてみた。

「本居大刀自の八十賀寄鏡祝」は、本居宣長の妻、勝子(一七四一―一八二二)の八十賀で、文政三年頃である。

「市岡猛彦」(一七八一―一八二七)は、尾張藩士で春門と鈴屋同門。文政十年没。

「中西重孝」(一七七八―一八二四)は、河内国喜里川村(東大阪市)の庄屋で春門門人。文政七年没。

「去年河内集といふものえらひつるに(以下略)」の「河内集」は、岩崎美隆や中西重孝等が編集し、文政二―三年に刊行された春門社中の歌集である。

「清水浜臣」(一七七六―一八二四)は、江戸の国学者。文政七年没。

「紫蓮尼」(一七五七―一八二七)は、河内国日下村(東大阪市)の上田秋成と交流のあった歌人。紫蓮は号で、通称は、唯心尼。文政十年没。

春門が大坂に住んだのは、文化十年から文政十一年にかけてであるが、美隆が春門の門人となったのは、十六歳頃の文政三年とされる。従って本書の原歌となったのは、春門在坂中、美隆入門後の文政三年から文政十年前後の詠歌と推定される。本書を、美隆が「近代和歌」と名付けた所以である。「岩崎美隆文庫」には、他にも筆写年不明の「村田春門自撰集」「村田春門家集」(いずれも、原題『藤門雑記 近代和歌』)などがあり、対比すると、さらに判明することがあると思われる。後考を待ちたい。

一 書誌

書型 二三三・〇×十六・三糶

丁数 七十五丁(墨付七十五丁)

表紙及び用紙 紺色布目地

内題 藤門雑記 近代和歌

印記「岩崎美隆文庫」

請求記号 LI2/911.204/12/1-49

資料ID 001507648

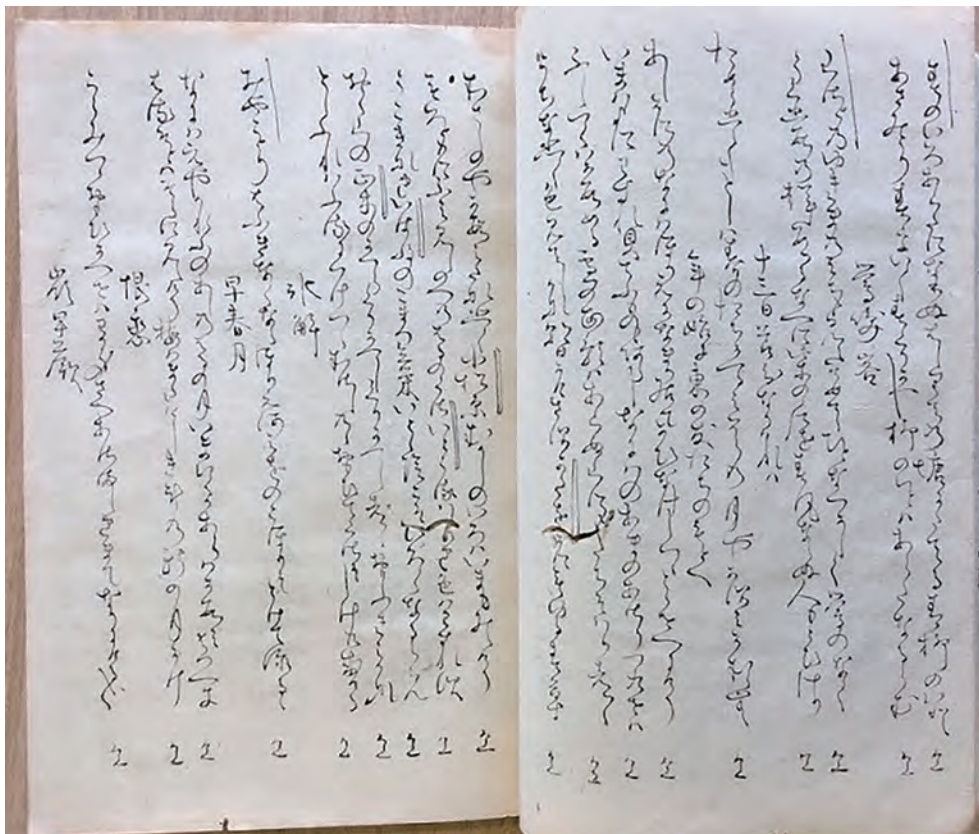
関西大学図書館手紙を読む会のメンバーは、以下の通りである。

森川 彰（助言者）、池尻孝子、鶴飼香織、田中純子、中川敏子、長谷
章子、瓢野由美子、福嶋真奈、八尾奈緒美

二 凡例

翻刻については、次の要領に従った。

- 漢字は、原則として常用漢字に改めた。
- 仮名は、原則として片仮名及び平仮名を用い、変体仮名は平仮名に改めた。
- 踊り字はそのままにした。
- 破損、虫害、判読不能は□で示した。
- 明らかな脱字については「」を付けて補った。
- 丁移りは「」で示し、下に丁数と表（オ）、裏（ウ）と明記した。



写真①

藤門雜記

近代和歌

万歳楽

はつはるの よことほきこと とりくくに うたふそらすむ 万世の声

春門

都霞

かも川や かすみなかれて うち日さす みやこおほちそ はるめきにける

同

はる風の ぬるまぬほとは 九重も またひとへなる はるかすミかな

同

江春月

水のうへに あそふほり江の みやことり 声かすむよの 月そのとけき

同

蝶

あさ風二 かきねの小草 打なひき さむるかてふの 春のよゆめ

同

早春興

梅のもと やなきのかけと うかれよる われをやいとふ 春のうくひす

同

「1才」

郭公

夢なれや 花ハあとなき 暁の まとの若葉の 山ほと、きす

同

ほと、きす わかやと、ひぬ うの花の 月よたしとハ つけぬものから

同

馬上郭公

ありあけの 月けのこまの をのへより くもにはなれて 鳴ほと、きす

同

与女待郭公

ほと、きす なれもこよひハ こもりつま こしらへかねて よを明すらん

ほと、きす

同

神祭

かみまつる 杜のしめなハ 夏かけて をりにあひけり ふちなミの花

同

山さとに かみまつるらし うの花の いろにたくへる そでのゆく見ゆ

同

あめはる、 杜の榊の 露ちりて ゆふへす、しき かみまつりかな

同

春雨静

うちかすミ あめそほふれり みよしの、 たのをいまか かりのたつ

同

らん

「1ウ」

雨中苗代

しめはへし なハしろをたの さし柳 それもミとりに 春さめそふる

同

貴賤更衣

みそのふハ いはしやしつか 袖かきも うの花かさね なつきたりけり

同

若竹

ことしおひの たけの末葉も ひろこりぬ のきのす、めの ふしなる、

同

まて

薬玉

たまにぬく たちはなあやめ とりくくに ひとにくからず かをるそて

同

荆棘

ささみちし つ、ミのうハラ 花うハラ あさゆふつゆの すかるなくなり

夏動物

あかつきの うハけのほしの かけ見ゆる かのこかりする のへの萩原

同

家々納涼

門に出て ことゝひかハし すゝむらし このひとさとの 夕くれの声

同

江浮草

にほとりの ならひてうかふ くさかえや くさのかたかき 夏の夕かせ

同

夏夜待風

かゝりひも やりミつとほく たきすさひ 風まちわたる なつのよはかな

同

河辺早秋

かりころも たもとすゝしも こまとむる ひのくま河の あきのはつかせ

同

あまの河 つゆのすかハラ うちなひき なきさのさとに 秋かせそふく

同

月前草花

夕つゆの ものしめやかに なりにけり 月のいろとる あきの花その

同

深夜擣衣

からころも うちおとろかす いめひとの ふし見のさとの 月そかたふく

同

月前竹

つゆちりて 月をさわかす くれたけの なかきにごひの 秋のよあらし

同

あきのよの

名所鹿

かせさわく 秋をうしとや 尾花ちる しつくの田居に 鹿の鳴らん

2ウ

禁中菊

さかりなる きくのかさしに ひさかたの ほしのかすそふ くもの上かな

同

九月十三夜によめる

かりのこす おくてのつゆの 玉かづら なかきよころも あかぬ月哉

同

かそへこし いけのもなかの 月よりも てりまさりけり きくの上のつゆ

同

また折句十三夜

下もみち うつろふ月の さよ中に むらくもはるゝ 山かけのさと

同

河にもみちの流るゝを

もみちふく あらしのゝちの のとせ河 のとかにミづの 秋そなかるゝ

同

擣衣幽

古衣 うちしくれゆく 山さとハ こゑかすかにも 更る月かけ

同

田家初冬

刈はてし いなむら雀 たちさわく かとたのさとそ しくれそめける

同

冬磯

みさこゐる ありその松の かせさえて こほるかおりの あまのぬれ衣

同

冬原

しもなから やまとなてしこ にほふ也 かせ吹さやく もろこしかハラ

同

あられ

玉あられ をさゝのかけに 吹ためて しはしは風の いろも見えけり

同

埋火

よにしらぬ 春そおほる 炭さして ぬるやこのめの かをる山さと

同

冬雨

春めきし 冬のゝひハリ こゑかれて くさのいほりに そゝくあめかな

同

千鳥

おきつなミ ひゝきのなたに 月おちて かこのみなどに ちとりなく也

同

枯野

かれを花 日かけみしかき ふゆののゝ のひのけふりの 末そしくるゝ

同

3ウ

初雪

くれなるの おち葉ころもを たちかさね 薄衣ハかり ふれるゆき哉

同

依花待春

さきてとく ちるつれなさを こりすまた 花としいへハ 春そまたるゝ

同

神楽

みひしろく たきすさひたる 暁の とほしひあねの そてさゆるなり

同

近恋

たちさわく よのあたまに しほふねの ならふとなりも 中ハ絶けり

同

寄柴恋

日にそへて やせとやせゆく 我身こそ もゆるおもひの ましハなりけれ

同

寄糸恋

かたいとの おもひよりても とけかぬる そのひとふしニ まよふころ

同

かな

いはくらの 山のいはかね よろつよを つみてうこかぬ みやこ成けり

同

4オ

雛すゝめのとひめくるを

ひなすゝめ はねならハしに とふものゝ こけのつゆをも みたさゝり

同

けり

故郷蟬

うつせみの 世ハつねなしや ふるさとの 松のミたかき ゆふくれの声

同

山中社中女方男方とわけてうた合しけるに女かたかちけれハ

月こそハ うハのそらなれ あめもよの あハれもふかく なくほとゝきす

こハ女かたハ雨中のほとゝきす男方八月前のほとゝきすなりけれハ也

同

鵜河

よもすから かゝりさしそへ 河浪の あらうの手なは くりかへすらむ

滝辺納涼

たきのいとは むすふにかたき ものながら なつハひとをも ひきとゝ

めけり

同

山家雨

すみなれし 山さとひとは かくはかり おもひいるとも 見えぬあめかな

同

漁舟火

海原ハ つきなきよはも はるくと ふねのかすさへ 見ゆるいさり火

同

秋草

うつくしミ よりてもひかん あきくさの 花のたもとに かゝるしらつゆ

同

寄髪恋

わたつミの 雁をふかめて みるふさの いはひてあくる いもかくろかミ

同

老人恋

おいなから 心ハなほも すきものと ひとのすさめぬ このミなりけり

同

夏興

かふちねに 月さしいつる 夕しほの ひかりす、しき 浦風ぞ吹

同

白地恋

たつぬへき しをりもとめす 天のとの あからさまなる 我ちきりかな

同

人に梅のミをこふとて

あめはる、この下やミに 色つきし うめのミをこそ ほしといふなれ

同

5才

遠夕立

川上の 夕立しるく す、しきも こゝにあふれて なかれきにけり

同

蓼

かたくえし 堰の小河 こしくに 野たてはなさく ミなつきのそら

同

夏声

松かせも す、しからすハ あらねとも いはねのミつそ なつの声なる

同

楊貴妃

そのいろの いつかもりけむ まとふかく おひさきこもる ひめゆりの花

同

寄剣恋

つるきたち なのたつかひハ なになれや みにそひてのミ きえぬ面影

同

田家晩夏

水ちかき あかたのさとの 瓜つくり みのやすけにも なつそなかる、

同

ゆふたちも ほとよくふりて うちなひく かとたのさとの 夏ぞす、しき

同

5ウ

螢火近秋

くれゆけハ ほのめきにけり あきちかき かとたのほたる ありとハか

同

水辺月秋涼

みな月ハ なかハなからに 小ふねこく 浪のうへには あき風ぞ吹

同

寄湊恋

なミた河 なかれの末ハ もミち葉の あきのみなどの 浪やた、まし

同

水無月萩のさきたるを

わかやとの むくらのつゆに いそかれて いろめくくさの 秋そあやしき

同

臨水観魚

いけミつも しつかに魚の うかひいて あきとふくれの 風そすゝしき

同

みな月ハかり志賀の山こえして

みな月や しかの山ちハ 谷川の なミの花こそ いまさかりなれ

同

松風如秋

ゆふたちの くも吹おくる 山かせの 松にさせたる あきのぬれ衣

同

6才

返事増恋

かきくらす くものかへしの 山風に ふりそふものハ なみたなりけり

同

寄舟恋

むねハなと あひかたからん よひくの とまりたかへぬ あまの苦船

同

恋不離身

ありとたに めにハ見えねと くもりひの かけこそこひの 心なりけれ

同

夕ぐれに雁のなくを

よみもあへす かりのたまつき かきけちて おつるやいつこ 夕ぐれの空

同

深林人不逢

もり陰に こけのこみちハ 見えなから このミをひろふ ひとたにもなし

同

八月十五夜によめる

なほさりに 月ハみせしと おほかたの 人をしつめて はるゝくもかな

同

十日菊

きのふより けふそまされる きふみて けふみるさくの 花の匂ひハ

同

6ウ

霜風九月空

わひしらに ましらなく也 暁の 松のしもふく ミねのあき風

同

禁中月

ひさかたの 月の御あそひ いくをれか そてかへすらむ あきのミヤ人

同

陵園妾

ときめきし むかしの秋の 夢さめて まくらにさゆる 東明の月

同

渡雁

萩見つゝ よとちをゆけハ からろおす ふねよりさきに わたるかりかね

同

寄雨恨恋

なみた河 ミかさまされと ふる雨の あしもとゝめす かへる関かな

同

折紅葉

一枝たに もみちにあける 山守と おもひの外に ゆるさゝりけり

同

古都秋風

柴垣の ミやちハふりて 葛花に そてのゆかりの あき風ぞ吹

同

7才

いろかへぬ 松ハむかしの 秋風も ふるきミヤこハ ものそかなしき

紅葉帯霜

もみち葉の いろをハ色と そめなから あやしくしらむ あけほの、霜

同

秋夕情

草のいほの 秋の夕を かなしとも うしともいかて ものはいふへき

同

秋良空

とこよもの 橘におく つゆしも、 いろめくあきの 風そみにしむ

同

たをやめの そてのかさねの 色さへも ふかくなりゆく 秋の夕風

同

秋旅泊

こきはつる 秋のミなどの 舟の上ハ なくさむかたも 浪のうききり

同

秋時雨

まくす葉ハ なにのつみなき しくれをも 恨かほなる 山風ぞ吹

同

李婦人

みえなから こともかハさす おもひのミ そらにきえゆく まほろしそ

同

九月空

かきりありと みすくす秋の 心さへ あやなくさわく みねのうきくも

同

犬

しのふれハ よその門もる いぬさへも 心おかる、 よはの声かな

同

汀氷

みきハにハ とりたにもゐす 浪の音も 氷の下の 冬こもる夜ハ

同

秋夕鐘

入相の かねのひ、きに こたへつ、 ちるか尾花か そてのしらつゆ

同

秋月

くさのつゆ おきて、月を 見よとてや いとしも秋ハ よなか、るらむ

同

懐旧

ひとのよの ならひとおもへと なけかれぬ けふハきのふの むかして

同

ふこと

秋神祇

柳葉に いなほぬきかけ さとひとも 匂ひさかゆる 神まつりかな

同

惜秋

おいぬとて せめてをしむも ゆく秋も よのことわりの 外ならしをや

同

寄関屋春恋

ひとめもる せきやにたつる を車の めくる月日も かそへられつ、

同

田上霧

かりのこす おくて吹わけ うき霧を はらひもはてぬ 秋の夕かせ

同

漁村秋

うをおとる かのいり江の いとす、き つりハリとのミ 三日月のかけ

同

秋夢

みつくへき ものとハなしに 長夜の ゆめにもゆめを たのミつるかな

同

初冬山家

山さとハ さわくこの葉の おともなく ゆふあさりして とりハいにけり

同

山さとに かりのこしたる 柴くりの もとあらハなる 風そさひしき

同

山さとの ふゆそさひしき もみちハ、 鳥居からして その色もなく

同

名所千鳥

ぬはたまの 黒牛渴の さよちとり 月をし松の かけに鳴らむ

同

時雨驚夢

あかつきの あハれしれとや むらしくれ 恋せぬひとの まくらとふらむ

同

互忍恋

うきながら しのおこゝろの たかハぬを たのミところに こふるころ

同

小柴垣に菊のさきのこりたるを

なほ秋の しめのうちとも 見ゆるかな おくれてにほふ しらきくの花

同

初冬風

冬たてハ いと、ミたる、 しのすゝき 花ハのかせの 吹つくしつ、

同

9才

初冬

さのみなと うちしくるらん かミな月 たちしをしらぬ ひとハあらしを

しくれふり もミちみたれて なかくに 冬のはしめは さひしけもなし

同

稀恋

あふことハ 秋の七日ハ いみつるを いかてあえたる ちきりなるらむ

同

雨中灯

あめさそふ たけのあらしの 打さわき ひかりさためぬ まどのともしひ

同

残紅葉

山かけや 誰あつらへて ひととハ 風のよきたる もみちならむ

同

薄暮思秋

いまさらに おもへハゆかし 色もなく かれふるくさの あきの夕かせ

同

一鳥過寒水

よるなミの なかハこほれる 嶋つとり うたてつはさを しる河風

同

うき妻を なくさめ兼て をしとりハ さやくあしまの 床はなるらむ

同

木枯

おち葉さへ なほもふくなる こからしの 風のおゝろそ あやしかりける

同

寄笠恋

うきことの ありますかゝさ きてもなほ なミたのあめハ せんかたも

同

誂恋

あつらへし のちのこゝろの わりなくて おほつかなさを くりかへし

つ、
同

朝霜

と、めえす わかれしこまの あと見えて あさしも白し かのの棚はし

時雨

しくれ二ハ きそひおくれて もみちはの つゆにもかさす わかたもと

かな
同

冬野

ほたでのミ かつく見えて 冬のゝの 夕日あへなく かけくれにけり

冬衣

山人ハ このはころも、 ちりのよに たちましハると 炭ややくらむ

冬鳥

そてくちの 色をかさねて 降雪の あた、かけなる 庭の松かえ

冬衣

ゆきふかき ミ山からすの うかれて、 ゑハみにあかぬ さとのゆふ

冬鳥

くれ
刈はてし 岡田にしめも いかるかも きゐて鳴なる 声のさむけさ

冬衣

かれくさを やくの、けふり 打靡 冬のそらとも なくひはりかな

冬鳥

くさハ根に 春まつへの 朝附日 声をかすめて ひはり鳴なり

冬衣

紅葉のちりたる池二に氷ゐたる

冬鳥

日へへても なほくちはてぬ 紅葉の 秋ハ氷そ へたてなりける

冬衣

ちりうかふ 秋のにしきの ひもか、ミ 風こそけさハ むすひそめけれ

冬鳥

花とちる ミゆきのつらの すり衣 きそひたちけり のちのあけほの

冬衣

海辺冬

ちりかひし あしの花さへ なにハかた 冬ハかせのみ ある、海つら

同

夜神楽

御火しろく 雪の花さへ 打ちりて あくときしらぬ かミあそひかな

同

赤紐の あかつきかけて あそふらし 杜とよもせる 声のきこゆる

同

隔遠路恋

はるかなる 人をこふとて はゆまちの すゝろなるねの なかれつる哉

同

おなしよに ありとはかりを しるへにて とほきこしちの ゆきやけな
かし

独見雪

みつゝたゝ ひとりのにミそ かこたるゝ 椎のはたれの きの白ゆき

同

ひとりして みるに心ハ なくさまで うもれかたくも 雪そふりける

同

寄苔祝

いくそハく 年をかさねて このやとの いはほのこけの 花ハさくらん

同

神のます ミ山の松の さかりこけ なかゝれとのミ よをまもるらん

同

松延齡友

たちなれて ともしミれハ 松かえも おのかちとせを たのみかほ也

同

山初雪

風交ニ けさそふりくる ミやまにハ めつらしからぬ 庭のしら雪

同

寄花懐旧

も、世へし そのよの春に 色もかも をちかへりてや 花の咲らむ

同

早梅

梅の花 なれハかりこそ うれしけれ ふたゝひ春の いろを見すれハ

同

冬かけて しめつるそのゝ 梅の花 こゝろはるなる 色を見せけり

同

蕪

梓弓 はるまつさとに ひくものハ ミとり葉きよき かふらなりけり

同

あさみとり おくしもながら うちなひき あさな夕なに とめるさとかな

同

12才

立春

山からす 鳴てそわたる ひとゝせの ものゝはしめの 春の初声

同

あさミとり 水なきそらも としなミの けさたちかへり はる風そふく

同

としへても 春たつけふの うれしさは たとへていはむ ことのはもなし

同

正月二日風いとあらく雪折々ふりけれハ

雪さそふ 松のひゝきも けふといへは 心からなる はるのはつかせ

同

こそこのくれに

さこそよの ことわりならぬ 花紅葉 ことそともなく くるゝとし月

除夜

夜をまもる まてこそあらね 厚氷 うちとけてしも ねられさりけり

同

早春雪

さほひめの たつやかすみの 袖すりて 春またさむき あわ雪そふる

同

山家早春

花鳥の いろねもおそき 山さとに はるたつことを たれかつくらん

12ウ

同

七日のひよめる

わかゝへる ものかハあやな としことニ のへのなゝくさ つミとつめ

同

山中家の人々例のことわかなおくられるに

つみはやす のへのわかなハ 春ことに うれしき色を ひとに見せけり

同

七日雪ふりたり六日子の日なれハ

ねの日せし きのふのゝへの はつわかな ちよをかさねて つめるけふ

同

かな

忠礼主きのふ住吉に詣て松をひきてきたりとして

けさ見れハ うつしうゑたる 松の葉に 雪もつもりの 庭の

おもかなとよミてみせられけれハ

同

春雪晴

さほ姫の かすミのたもと おふハなむ はるれハきゆる 春の沫雪

淡

同

13才

松かえの 花とふりつる あわ雪ハ 春日しもこそ あらしなりけれ

同

鶯遅

うくひすの ものうきほとん 鳴音たに きかハやおもふを さゆる朝風

同

春霞 へたてハいかに けふも猶 声もきかせぬ たにのうくひす

同

暁梅

うめかゝに あやしや心 さのミなど おもひしむらん あかつきのそら

同

朝梅

いさときも たれゆゑならず 月のこる 梅のこすゑの 鶯の声

同

早春霞

おき浪と をのへの松と たちならひ いつれか春ハ まつかすむらむ

同

またあさく 霞そなひく 春も猶 ミ山の雪の ふかさしられて

同

早春雪

うつもれぬ 声そ春なる あわ雪に 松ハいろなき 庭のうくひす

同

雁ハまた 秋こしかたを かへりみる 心もなしや ミねのしら雪

同

若菜知時

しもさやく をきのかれふを かき分て ちきしるわかな けふやつまゝし

同

八千くさの 春てふことハ 若菜こそ ひとつままれて まつハしるらめ

春の色は けふのわかなに あらハれて 野にも山にも うつりゆくらむ 同

いちはやく 春しるものハ あさみとり のへのゆきまの わかな也けり 同

霞遠聳

吾さとの 雪もけなくは はるかすミ とほ山とほく なひきそめけり 同

朝日かけ けしきハかりハ かすみけり 雲よりをちの 雪のとほやま 同

春たちて いく日もあらねハ あさもよし きのとほやまに かすみたな 同

ひく 春のいろハ またひとへなる 朝霞 八重山とほく かすみそめけり 同

柳糸緑新

春のいろ あらたになりぬ はしりての 塘にたてる 青柳のいと 同

14才

あさみとり 春をいく春 くりかへし 柳のいとハ あらたなるらむ 同

鶯喩客

山さとの ゆきまのミちも 見えそめて ひとなつかしく 鶯のなく 同

うくいすの 声するなへに 柴の戸を 春風ならぬ 人もとひけり 同

十三日節分なりけれハ

ためらひて ことしハ春の たちかへる ミそらの月や かすみそむらむ 同

年の始に東の友たちのもとへ

あしかにの なにハほりえに なまり居て かひなけしつ、と、せへに けり 同

いまハよに わすれ貝てふ ものもあらし なにハのあまの あざりつく せハ 同

ふしつくハ かすめる雪の 面影ハ あらぬ山にも たちそハリつ、 同

うちなひく 色見てしかな 朝日かけ さすかたをかにもゆる春草 同

むさしのや かすみたなひく 小松原 むかしのいろハ いまもみえけり 同

もろともに ふみ見しのへの はるのくさ いたうるハしき 色ハわすれす 同

うこきなき いはねのこまつ 立栄 いと、陰こそ ひろくなるらめ 同

おく山の 正木のかつら くりかへし くりかへしつ、 おもふきミかな 同

としふれハ ふるにつけつ、 むさしの、 おもひてくさそ しけく成ける 同

氷解

みやことり はふきなくなる ほりえ河 ミをのこほりそ とけて流る、 同

早春月

なにハえや かれふのあしの はるの月 いまいくかあらハ かすみはつ 同

へき はるそとハ そらに見えけり 梅ハまた けしき斗の 軒の月かけ 同

恨恋

うらみつ、おもひかへせハ わか身さへ あさましきまで なりにける哉

嶺早蕨

15才

いつしかも もえにけるかな ときしらぬ 松のかけなる ミねのさわらひ

のとかなる 風やしるらむ 柴人に をりのこされし ミねのさわらひ

寄都祝

とのつくり しけきみやこハ さきくさの ミつはよつはに 春風そ吹

ものさハに ゆたけかりけり 東人の ミかとをかみに つとふみやこハ

水郷霞

梅か、は そらになかれて たましまや な、せにかすむ 有明の月

ミなかみの 雪けの水の うちけふり かすむ、つたの 柳原かな

幽居鶯

軒ちかき たけになくなる 鶯ハ 人すめりとも おもハさるらむ

うくひすの うらなき声も きかせてん とへかしひとの 春の山さと

梅さけと うたてさひしき やと、てや うくひすさへも まれに鳴らむ

曙霞

15才

ひむかしの 空ハにほひて 明ほの、 山かけくらく たつかすミかな

恋風

おほふねの おもひたゆたふ ほとそうき 恋のミなとに かせまもりして

某の四十賀に

ことしより 老の山口 わけそめて ちよのしをりハ 君のこさなん

青山正俊か四十賀

はりまのや ミねにくもゐる 青山の 松のちとせハ 君そしらまし

梅

うめの花 めつとハかりに ゆき過て 吾袖のかに おとろかれけり

曙鶯

あけほの、 梅のかをりに むせふらん かすミのをちの 鶯の声

恋風

をりくハ ミさを、まもる 松にさへ ものなやましの 山風そ吹

毎年登梅

16才

月のミか はるてふ春に うめの花 めてのつもりも 老となるらむ

いろもかも こそにかハラぬ 梅の花 さのミハなに、 めつるなるらむ

春草緑

ふるよもき 根をも絶すて 山陰の 壘田のくろそ わかみとりなる

かまと山 けふるみとりハ 春の日に もゆるみくさの うつるなるらむ

為君事容飾

あさ毎に わかるとるねやの ますかゝみ あたしひとにハ ミえしとそおもふ

梅さかりなるやとにまらうときたり

ものなへて ふりゆくやとを さく梅の おもておこしに ひともとひけり

同

ふるさとの うめのいろかも しる人に しらるゝはるの あれハありけり

同

梅香薫袖 16ウ

ことならハ ちりなんのちの おもひてニ わかそてかれす 梅かをらなん

同

江上春月

ミしま江や 浪のまに〜 月ミえて あしの若葉の 露そかすめる

同

難忘恋

きミゆゑに おつとおもへハ 明くれの わすれかたミそ 涙なりける

同

春風夜芳

春風ハ そらにさそひて 梅かゝを 月のかつらに かさんとやする

同

いくさとの 梅のこすゑを 過てきて 枕とふらん よはの春かせ

同

山畑

山陰の はたのしゝかき たかけれと こえてもをらん 春のくゝたち

同

閨正月子日

うくひすハ 耳ならしても けふも猶 はつねののへと いふへかりけり

同

余寒

はるのよも なほおくしもに うつみひの あるかなきかに きえかへり

つゝ、 ささかへる ゆふへの雨の 雪ませに 花の名たての きさらきのそら

同

かへるかり きりたつ秋の おもかけを 月にかすめて ミねこゆる也

同

かへるかり ミちゆきふりに 鳴すてゝ あきをたのむの 声そはるけき

同

月前柳

ゆく月ハ くもりもはてす 青柳の ミとりにかすむ 春のよのそら

同

うちなひく ミとりのいとこの あや見えて 柳にかゝる 春のゆふ月

同

花まつ比あめちかけなれハ

あめちかき ほともしられて 春山ハ むらさきたちて かすむ夕くれ

同

かそいろと いふなる雨を まちいそく さくらかえたも かすむはるかな

同

花ゆゑハ けふハまたるゝ 春雨の いとはるゝにや わりなかるらん

同

春日山行 17ウ

おほゝしく よもハかすミて のほりたち いさみの山は ことにし有けり

同

われかとして とふらハましを 山ゆけハ ところもわかす とりそよふなる

同

同

かすみてハ みるめなしてふ 海ちかき 山路なからも 心ゆきけり

同

紫蓮尼のいほに盗人いたりとて歌よみて見せられけれハ

しらなミハ たちやよりけむ としふれと なまめかるてふ 海人のいほ

とて

同

春月朧々

山川の きよきなかれの 底にさへ 春のさかとして 月そかすめる

同

角法師の花につけて はるさめに そほつさくらの

はなの色を みせはやきみに つゆなからたに とよめるかへし

いたづらに なかめハすてし ふりはへて こてふにゝたる はなのへの

つゆ

同

はるさめに ぬれきぬきせて あたらしき 花のえたをも 折てけるかな

同

蛙

山川の ミくまのすけの ねもさやに かハつなく也 かすむよころも

同

18才

朧月

春のよハ あらしもたえて 九重の とのへの月の かけそかすめる

同

山寺にやとりたる夜

かたしきの まくらにちかき たきのいとハ ゆめもむすハぬ ものにそ

ありける

同

水辺落花

みかはミつ さそひいてけり くもの上の くもときのふハ 見えしさく

らも

同

鳴上桜

むれつとふ あまのさへづり のとかなり おきのこしまも さくらさく比

同

野亭桜

かりそめの のへのいほりと 見えなから ふるきのさくら さきをり

けり

同

柚山桜

宮木ひく 柚山かづら なかきひも あかぬさくらの 花のいろかな

同

暮山雲

柴人の かへる山ちハ 入日さし とよはたくもの 色そくれゆく

同

ものへゆきける道にて

ふるさとに たちにしかりの なこりニハ すゝな花さく さとのあらをた

同

鶯

さかりなる 木ことの花に あくかれて ところさためぬ 鶯の声

同

夕春雨

苗代の はるの夕の あまころも たみのゝしまは かすミ杲けり

同

遠尋山花

人こそハ ものゝたよりと いふめれと とほ山さくら たつねてそ見む

同

こしかたの 花ハかすみに うつもれて またみぬ山に かをるはる風

同

中春

わかやとの いけのゝころも のとかなる 春のもなかに かはつなくなり

田うつ

春ことに うちかへしても かへしても すゝなの古根 花さきにけり

19才 同

水ぬるめり

ぬるむめり 井杭にかゝる かけろふの そらにミたる、 春の川水

同

桂陰の花見にゆきて題をさくりて

こと木々ハ 皆うつもれて 五百本の 花しつかなる にはのおもかな

同

花間月

ちりそめぬ 花をこのまの かけかすむ 月のみやこの 人にミせはや

同

春のよの 月のかつらの 花衣 かへすゝも たちうかれけり

同

女どものたちまひ今やうたひなとしけれハ

うちふるや あまつをとめの そての上に 花の雪ちる かつらかけかな

同

八重ひとへ さかり久しき 花かけハ ものおもひしらぬ 所なりけり

同

夕つかた

ゆふつくひ ふかくかすミて 庭さくら こすゑおもけに 見ゆる色かな

同

をりゝハ 花の梢をうこかして あかしめさせぬ 庭のはるかせ

同

またのひよろこひひやるとて

さかりなる 庭のさくらの おもかけハ うれしき色を けふもみせけり

同

けふハあめのふりけれハ

こん春を かけて契りて ふるあめに うつろふ花を さそをしむらん

同

柴門人不到

たれならて おとするものハ 松かけの 柴の戸かろき かとの朝風

同

心静酌春酒

春の日ハ むかふこゝろも うらゝと かすみにゑへる 夕くれの空

同

はるの風 しつかにゑへり うくひすの ねくらのさゝと すゝめやハせし

同

枕塵

かゝみさへ ちりみくもれり ものうくて はらハぬねやの 枕のミかは

同

寄綾恋

そてくちの あやのいろめに まよふかな をすのすきたる 吾こゝろより

同

ひとむらに おもひさためす いろこのむ ひとのこゝろの あやのそめ

同

きぬ 名所橋

わかれこし みやをとほミ たひゝとの そて三州ひつ川の はしとい

同

ふらむ 亀のうた

かめのこの うまこのすゑの 末の子の すゑのよはひも きみそかそへむ

同

寿の字を八十四の女のかきたるに

同

20才

よね山ハ ちよの坂口 ほともなく わけのほるへき しをりなるらむ

同

霞中花

みにきつる 心もしらす 春霞 をのへのはなを たちへたてけり

同

けふもまた たちてゝたとる はる霞 はなにかゝらぬ 山のはもなし

同

20ウ

春崎

あまのかる ミるめハいと、 とほつあふミ あらいそさきを かすみこ

同

めけり すみよしの ミさきにひろふ 蛤の かひある春の あそひなりけり

同

春橋

いはゝしの まちかくみえし 水上も かすみとほき 春の山河

同

かきつはた 花さく沢の やつはしハ あめのくもてに かけわたしけり

同

契沖阿闍梨の真蹟にそへたるうた

あしの葉の ちりのまかひも 見えぬかな なにハたかつの 水くきのあと

同

山家夏来

山さとの かき外の柳 うくひすの かよひちくらく 夏ハきにけり

同

かせをまつ 夏こそきつれ 花ハ皆 春のたむけの 山かけの里

同

貴賤更衣

よのさかと なかくみしかく たちかふる そてにもなつの しられつる哉

山さとも みやこもおなし 夏衣 色こそかはれ たちかへりけれ

21才

同

寄漁父恋

ふなはたを たゝきてうたふ ひとふしニ うらみてけふも かへりつる哉

同

おくあみの うきにたえねハ いまハわか みをうみわたる 海士と来て

同

杜若

夏もや、 ちかきとなりの かきつはた すゝしきいろに 咲そめにけり

同

春のくれに山路をゆく

わか葉さす たにをへたて、 いはゝしの まちかき夏を とりやよふらん

同

春のゆく かたやいつらと ふちなみの かゝる山ちに まよふころかな

同

すをへたてゝかたる

たそかれの ものゝまきれを たのミてそ いやすのそよと ことかはし

同

ける としをへし こひのしるしニ おなしくハ をすのうちをも けふゆるさ

同

なん

21ウ

暮春夕

日をふれハ かすみもいまハ うすゝみの ゆふくれおそき 春の山のは

同

雨中藤

いろ見えて おのつからにも 藤並の 花のつゆちる あめそしつけき

古井蛙

おふなく 春ハしれとも うもれるの ミつからうしと なく蛙哉

こゝをせと よの春しらて とし月を ふる井の蛙 声つくすらん

寄武士恋

はかなしや こひのやつこに せめられて たむかふわさも なき心ちせり

ひたりての わかおくのてに とる者の つかのまたにも あふよしもかな

つまこもる やとにそまよふ ものゝふの 道をわりなく ふミたかへてハ

嶺郭公

ほとゝきす ミねのこたまに なく声も 二むら山の 明かたの空

さつきやミ をくらのミねハ 雨雲の たちまよひつ、 なくほとゝきす

いたづらニ おもひそわたる 浪さわく そてのみなとハ ふねもよりこす

ゆめちにハ なにのさハりの あれハかハ かへすころもの しるしな

らん すたれをへたてゝかたる

よしすたれ はかなくかくる ひとことも あハれみにしむ 夕風そ吹

となりにことひく

あしかきの ひとへハかりの へたてにも 心つくしの ねそなかれける

庭草滋

たかために よもきかもとの みち分て つゆはらふらむ にはの朝風

しけりあふ にはのよもきの うもれ水 ひとかけさへも みえぬいほ哉

あめのゝちほとゝき〔す〕をきく

あめはるゝ たミのゝしまの ほとゝきす あしの下ねに 鳴てすく也

たちはなの つゆうちはふき ほとゝきす あまゝをよみと けふや鳴らん

たかうな

おひそひて おやにそむかぬ たけのこハ おのつからにや ちよもたる

あふことハ さらてもとほき なけきさへ いとゝくはゝる 月そくるしき

隣泉

かきちかき いつミ吹こす ゆふ風ハ あきのとなりと おもほゆるかな

わきかへる となりのいつミ あまり有て かきほすゝしき 夕風そ吹

夏衣

かららかに こしのをとめか おる布の にはひすゝしき 夕風そ吹

垣まみに おとろかれけり はしたなく あれたるやとの 姫百合の花

採早苗

23才

松かけに ふねさしすて、あまをとめ さなへとるらん あの、ミなと田

同

早苗

入日さす すそわのをたの 若苗に 吹つたへけり ミねのまつかせ

同

夏眺望

おほよとの うらのみるめの す、しさに いせをのあまと ならむとそ
おもふ

同

庭樹結葉

にはのおもに 月八もらねと ほと、きす こてふに、たる なつこたち
かな

同

五月雨晴

さミたれの あまかなりつる ものうさも はれてた、さす あさひかけ
かな

同

寄池恋

さしてしる よしもなミたの 水たまる いけのこ、ろの ふかさあさ、を

同

庭夏月

水そ、く にはのをくさの つゆのまに あくるす、しき 夏のよの月
23才

同

棟如雲

花あふち くもと見そめし あしたより はれまもおかぬ さミたれのそら

同

つれくの なかめはれゆく 吾かと二 ゆふあるくもハ あふちなりけり

同 城

洲芦夜雨

ふり過る すさぎのあしの むら雨に 月のやとりの つゆそみらる、

同

納涼

あしかげや す、みかてらに ふねよせて あく時しらす つりをしそする

同

ミつきよき 岸におりて かり衣 ひもたにさ、て あそふす、しき

同

六月祓

わか国の なほきてふりそ しられける 青ミな月の けふのミそきに

同

なにハの海 なみにた、よふ 青菅の すかしくも はらふけふかな

同

夏動物

さとわたの ちまちいほ町 すきハて、 牛はなちかふ 夏くさのハラ
24才

同

夏の、の くさのしけミに ふすしかの た、ひとつこそ あハれ也ける

同

野郭公

ほと、きす けふりもたかし きみかよの とふひの、へに いまそ鳴なる
きみかよハ えて ほと、きす

同

山とほき あらの、ハらの ほと、きす まよふかくもの ちまたにぞ鳴

同

夏河

たかミそき せ、にたてたる 夕浪の よるへす、しき 河やしるかな

同

吹かせハ さすかにす、し あつきひに さ、れふミわたる 夏の山河

同

夏夕

あきつはの うすきそてさへ ものうさに ぬきてかせまつ 夏の夕くれ 同

夏の日になえふすくさも しらつゆの おきかへりつ、 なひく夕かせ 同

蓮

ゆりこほす ひろはのつゆの 玉はちす いけのこゝろも きよく見えけり 24ウ」 同

朝日さす おまへのいけの はなはちす うすくれなゐの いろそたゝよふ 同

葵

をくるまの をすのすきかけ なつかしく かけならへたる あふひくさかな 同

夏朝

むら雨の すきゆくのきの 朝しめり なほいふせくも のこるかやり火 同

うちなひく 萩のわかえの たわくくに 朝つゆおびて あきをまつらん 同

夕顔

はしたなく みゆるものから すゝたれぬ しつかわらやの 花のゆふかほ 同

ゆふかほの はなのほひハ それなから をりにたちよる ひとかけもなし 同

氷室

あまつたふ ひむろの山の 松かけハ ゆくてのそても すゝしかりけり 同

夏の上月おもしろし

月きよみ をりてかさせと うつろハぬ しものはなさく 庭の夏草 25オ」 同

新竹

よきほとに 葉もほころふる わかたけの かけこそ夏の ふしところなれ 同

舟にのりてものへゆく

わかふねを きしこきゆけハ 松原の うこくとみえて とほさかりけり 同

林中蝉

たゆみなく 声をあはせて 谷河の 水もはやしに せみそなくなる 同

なくせみの 声そすゝしき むらさめの くものはやしの つゆにむせひて 同

日をさふる はやしのかげの こけむしろ とつくしよしと せみの鳴なり 同

夏想

いもかひく をけの夏その あさましく おもはぬひとを ミたれてそおもふ 同

吾心 やみにまよふを しまつとり うたてもひとの あらひゆくらむ 同

ちかくてとほきもの

むかひてハ ちかのしほかま ちかなから おもへハとほき ミちのおくかな 同

あまの河 もミちのはしハ かけなから としのわたりそ はるけかりける 同

みきひたり ちかきまもりと いふめれと あふけハたかき 日のみかけかな 同

しきたへの まくらのゆめの おもかけハ たゝそれなから 明るよはかな 同

山さとハ ちかきとなりも 朝夕に くものやへかき 立へたてけり

同

めにちかき よのことをさへ わかミ、ハ おほろのしミつ くみまよひ
けり

同

しらくもの こたふる声ぞ はるかなる 吾ゐるてらの 入相のかね

同

八重山吹

いはぬいろに やへさきにほふ 山吹も われとひとしき 春やかさねし

市岡猛彦

恋

ものゝふの たけきわかみと おもひしハ こひせぬほとん こゝろなり
けり

同

神祇

御剣を いくあつたの みやはしら よにぬけいて、 たかくたふとし

同

26才

蚊遣火

みやまにと おもひたつまで かやり火の けふりいふせき よにこそふ
けつ、

同

月前水鳥

おのか名の をしとおもふよの 月かけ二 ねてハあかさぬ 声そきこゆる

同

野月

夕きりを はらふるなのに すむ月も やとこそなけれ つゆの秋風

同

立秋暁

みにしミて おとろかれぬる あかつきの かねのひ、きや あきのはつ風

同

春虫

はふむしの もとのつらさ、 とふてふハ はるやむかしの ゆめになすらむ

同

余寒

梅かえハ 風のミさえて たきもの、 かこそとにほふ 春のうつミ火

同

26ウ

なてしこ

くれかけて たれをまつとも しらつゆの たましくやとの とこ夏の花

同

河内国人岩本周道かはしめてとふらひきて たつねこし

さつきのそらの あまくもに はつねきかせよ 山ほと、きす

とよめるかへし

たつねこし かひもなこやの さとひたる 声をきくらん 山ほと、きす

同

又 わかそてに なれてをとめん 橘の き、しにまさる やと

のほひを とよめるかへし

ことのはの はなのほひハ ときしくの かくのこのみに あまるうれ
しさ

同

堤

水きよき 川そひつ、み す、しさに ゆきかふひとの あしそよとめる

春門

しからミ

いかはかり なミのしからみ よせかけて かくしもそての す、しかる

同

水風涼

うちなひき ミくさ花さく 河曲ハ 秋をうたかふ ゆふ風ぞ吹

同

夏によむしなく

27才

あきのよの なかきおもひを 夏くさの したねにむしの いまよりそなく

同

蓮

はすのいとハ むすひもとめす ひろはより ひろ葉につゆの たまうつ
しけり

同

初秋薄

我がとの 秋のしるしの はたすゝき たかくさして、 まねきつるかな

同

七月立秋

みな月ハ なかれもはてす ミそき河 はやくあきたつ 浪の白木綿

同

夏のはて

おほぬさの よるせも見えて 夏の日の中 なかれよとまぬ 河やしろかな

同

行客船已遠

わかれてハ ふねのうへニも かへりミる やまとしまねや はるけかる

同

夏暁

あかつきハ ミねのほくしを さしすて、 くだるかさわく むさゝひの声

同

河水流清

月も日も とゝこほりなく なかれゆく 水の心の きよき山河

同

水草の花さけり

はしハあれと おりてわたらん 打なひき こなき花咲 さとの中河

同

夏のひハ をたのなかゝは せき分て ミつもあさゝの 花さきにけり

同

夏によむしなく

このよころ 庭のをくさに つゆかひて 我まつむしの 声そきこゆる

同

晩蟬

吹おろす うらての山の 夕風に すまふかせミの もろ声になく

同

すまのうらに秋の月きよくすみわたりたる

秋のよの 月のよころの 松風を いかにくくらむ すまの浦人

同

湖水連雲

ともにたつ ものなれハにや 水うミの くもとなミとは つゝきたるらむ

28才

内心如夜刃

ゆるされぬ をとめの笑の まゆなれや おもふこゝろの ほとをしらねハ

同

萩風

風ふけハ むしもしはしは 声やめて 人をうたかふ 庭の萩原

同

聞虫

ゆふ月夜 けしきそへけり なくむしの 声もさかりの つゆのくさむら

同

新月

くもはるゝ 八重の山なミ あさやかに かすよむハかり てれる月かけ

同

風生竹夜窓間臥

同

くれたけの よ、し月よし 風もよし こよひは□□ ふしよかるへし

同

しのひてた、く

28ウ

しのひつ、 た、くいたとを き、しりて あなかまとたに いふひとも
なし

同

くひなにも おとる吾身の ちきりにて た、きり□□□□ いもか、とかな

同

山さとにきりたてり

し、かきに きりのまかきを ゆひそへて たちいてんそらも わかぬ山里

同

朝霧

あり明の 松にこまれる 秋きりの たえまも見えて 朝風そ吹

同

夢中逢恋

ゆめちにハ さはるともなき あふ坂の せきをうつ、に ゆるさ、るらむ

同

初秋薄

井の上より あきこそかくれ ミつひきの いたうちなひく しの、小薄

同

春草

よきほとに なひきそめけり わかやとの てふのしをりの 庭のわか草

同

水辺稲妻

みなそこに いるかと見えて いな妻の ひかりなかる、 よはの川つら

同

秋夜増恋

ひとりねの 秋はたさむき つゆならて よひくことに まざる吾恋

風いたくふく夜

同

吾夢を よはのまくらの 山風の さそふはなにの かひかあるらむ

同

雨中聞鹿

さをしかの 声さへあめの しめやかに ふるよはことに 秋そかなしき

同

初秋

つゆむすふ しつかわたの はしりほの ほのへよりこそ 秋ハきにけれ

同

山家眺望

をりくハ 山のいほりを たちいてて めをもくもゐの よそにやる哉

同

まれにこし ひとをおくと 山ちより 海のみるめも けふ□かりけり

同

親鸞上人五百五十回忌

はちす葉の ひろきみいけの 心より よにたちいて、 にほふ花かな

同

月照海辺

よふねこく いせをの海人の そてさへも さやかにてらす 秋の月かな

同

くたけちる いそわの浪の しらたまハ ミなから月の 光なりけり

同

深山月

おくやまの まきのいたとも 秋ハた、 さ、て月まつ よをかさねけり

同

そ、ろなる そてのつゆかな おく山の まきの葉にほふ 秋のよの月

同

八月十四日夜

いつしかと としのひとゝせ まつよひの おもてふせなる そらのうき
くも 同

あまくもハ ふかけなからに さすかなる 月のよころの そらそいふせき
同

仲秋無月

ほのかにハ つゆもにほひて あめはれぬ くものうへゆく 秋のよの月
同

かりかねハ さやにきこえて 秋のよの 心つきなく はれぬそらかな
同

30才